

文化の話題

演劇

「呼吸機械」

(維新派公演)



「呼吸機械」の舞台—福永幸治(スタジオエポック)撮影

場所の力引き出した空間

一九七〇年に松本雄吉によって結成された維新派は、アンクラ劇の第一世代に位置し、現在もかつての急進性を保ち続けている数少ないグループだ。その特徴は、身体表

現の重視とともに、環境を利用した仮設舞台、大がかりな仕掛け、大きな骨格を持つものの極端に切り詰められた物語、切り込まれた言葉の反復にあり、日本のフィジカル

・シアター(身体演劇)を代表する劇団でもある。

去年からのシリーズ「彼」と旅をする二十世紀」では、南米に渡った日本人移民の目から新世界を見た第一作に続き、今回は、第二次大戦中の東欧の浮浪児の視点から戦争を描いた。「彼」と呼ばれるのは五メートルもあろうかという旅人で、主人公は彼に出会い、そのまなざしを感じながら成長してゆく。

物語は単純で、戦争を背景に浮浪児たちの友情があり、旅芸人一座との出会いがあり、対立と悲劇的な結末があるのだが、各場面は断片化、様式化されていて、筋を追うのは簡単ではない。しかしそれは観る楽しみを妨げない。一つ一つの場面に確かな視点が感じら

れるからだ。旋回をあまり用いない群舞は、バレエのように個人の身体表現力に頼る「形」を見せるのではなく、ラップ風の速いリズムの断片的な言葉と単純な動きの反復によって、幻想的だが劇的でもあるイメージを提示する。

今回は、背景に広がる湖水、舞台に寄せるさざ波が印象的な琵琶湖岸の特設舞台も、また「彼」をはじめとする様々な道具も、公演地の持つ力を引き出し、魅力的な空間を作り上げていた。大阪でも名古屋でも終電には間に合うとはいえ観劇には不便なところだが、出かける価値はある。

(北野雅弘・演劇学研 究者)

13日まで、滋賀・琵琶湖水上舞台(野外特設劇場)